

笑顔の裏にある努力

K S 大学大学院：国際環境工学研究科・1年

期間：平成30年9月4日～10日（5日間）

私は将来就きたい仕事を考えたとき、すぐに浮かんできたものがあります。それは人々を「笑顔」にする仕事です。日常生活で人が笑顔になる場面を想像すると、最初に、笑いながらテレビを観ている姿が浮かんできました。近年は一家に一台テレビがある時代であり、テレビから流れる映像や音を通して、子供からお年寄りまでみんなが情報を得たり、笑顔になることが出来ます。このように、人々を笑顔にするテレビから流れてくる映像や音がどのように作り出されているのか実際に自分の目で見てみたいと思い、今回、株式会社Iのインターンシップに参加させていただきました。

初日は番組制作の見学を行いました。子供からお年寄りまでわかる言葉の取捨選択、映像の編集、テロップのデザインや位置など本当に細かい部分まで気を配っており、「視聴者にとってわかりやすく、また観たいと思ってもらえる番組を作る」という一つの目標に向かって、制作課の方々全員が一生懸命取り組んでいました。また、一人が取材、撮影、映像編集、原稿作成まで一連の業務を行っており、時には午前中に取材してきたニュースをその日の夕方に放送することもあるということを知り、仕事の質に加えスピードも必要であることを学びました。

二日目以降は取材への同行や、テロップの作成、キャスター体験を実際に行いました。取材では現場の雰囲気や人の真剣な表情や楽しそうな表情をカメラで撮影したり、インタビューを行いました。撮影では重たいカメラをもって走り回り、インタビューでは話し手の気持ちを引き出せるような質問をするなど様々な努力がなされていることを実際に感じる事が出来ました。テロップ作成では必要最小限の情報を視聴者にわかりやすく、なおかつ映像の邪魔にならないよう、デザインや位置を工夫しながら作成しました。またキャスター体験では、キャスターさんの緊張感はもちろん、キャスターさんと制作課の方々との連携プレーの重要性を身をもって感じる事が出来ました。

インターンシップに参加する前までは正直、今回体験した情報・通信業は、現在大学院で行っている研究とはあまり共通点はないと思っていました。しかし、今回のインターンシップを通して、研究との共通点を二点発見しました。一点目は自分の情報に自信をもつことです。大学の研究においてエビデンスが必要であるように、番組で使用する言葉一つ一つにも根拠が必要であり、私たちが普段気にしない細かい部分までしっかり調べたうえで、自身をもって情報を発信しておられました。二点目は努力を怠らないことです。地道に日々実験をして結果を出す研究と同様に、番組制作でも印象に残る映像編集、原稿作成などを他の番組を観ながら学んだりしており、私たちの笑顔の裏には制作課の方々の努力があることを実感しました。

5日間という短い期間でしたが、大学の研究では学ぶことのできない貴重な体験をすることが出来ました。この経験を今後に関し、人々を「笑顔」にするために努力できるような人間になりたいと思います。

目的意識をもって

K大学：国際文化学部・国際文化学科・2年

期間：平成29年8月22日～26日（5日間）

大学2年になっても未だに働くということに実感が持てずにいた私は、仕事についてより深く考える機会にしたいと思い、今回インターンシップ体験をすることにしました。高校3年間で伝えることの難しさと楽しさを放送部にて学んだため、放送を仕事としているところであれば、それが仕事になるとどう変わるのか・学生生活と社会人の違いは何かを学べるのではないかと思います。ラジオ局のインターンシップに参加しました。

それまでは、「伝える」ということは、調べる・まとめる・発信する・考えてもらうことだと学んでおり、私自身もそう考えてきました。しかし、伝えることを仕事としている方々を見ていて分かったことは、そこには「動いてもらう」ことも含まれるべきであるということでした。人に何かの情報を届ける際には、ただ一方的に面白い・楽しい話をするよりも、それを聞いて何かをしようと思わせることが重要であるようでした。実際にコミュニティFMはその地域に密着した情報を届けており、ラジオの生放送を通して防府のまちを元気にすることを目的に活動されていました。

ラジオ放送を通して、企業・店・団体とそれらの客（リスナー）の間に入ることで二者を近づけ、町に動きが生まれます。そしてそれは、町を元気にすることにつながります。そういったお話を聞く中で、また実際に生放送で防府の話がされているのを見る中で、社員やパーソナリティの方々がいかにご自身の仕事に誇りをもっているのかが伝わりました。コミュニティFMの役割を理解し、そこに誇りを抱いているからこそ、パーソナリティの方々は、リスナーに防府のまちなかを動いてもらうように楽しい話をしているのだと感じました。仕事をする上で重要なのは、知識や技術を持っていることよりも、その役割を理解した上で動くことができるか、という点なのかもしれないと考えるようになりました。

また、社会人の方々に囲まれて気づいたことは、私自身の対人能力・コミュニケーション能力の低さです。これに関して特に痛感した点は、どこまで挨拶・自己紹介をするべきなのかがわからないということです。例えば、社員の方の説明を受けている間に、初めてお会いする社長が会社に戻られた場合、説明を中断して行われる挨拶のなかでどれだけ自己紹介をしていいのかわからなくなってしまい、ほとんどできなかったということがありました。他にもゲストが来られた際、私は、他のパーソナリティの方々に合わせて「こんにちは」や「お疲れ様でした」しか挨拶しませんでした。社員さんはゲストの方に私のことを「K大学から職場体験に来ている〇〇さんです」と紹介してくださいました。考えてみれば小さな放送局に何度か訪れる人であれば、初めて会う社員はあまりいないでしょうから、私のことを疑問に思うはずですし、そこまでの自己紹介を自分からすべきであったと反省することが何度かありました。

現時点での自分と社会人の間にあるギャップが、今回のインターンシップを通して見えてきました。これからの学生生活の中で、少しでもこの差を埋められるように目的意識をもって活動していきたいと思っています。

人との出会いを大切にす

K大学：社会学部・社会学科・3年

期間：平成28年9月5日～9日（5日間）

私は今回、5日間放送局でインターンシップを体験させていただきました。私にとってテレビは、毎日見るかけがえのないもので、そのテレビが作られている放送局とは、どのような仕事をしているのか、小さい頃から興味があり、自分の適性を見極めることも含め、今回のインターンシップに応募しました。

インターンシップに参加する前は、放送局での仕事というのは、労働時間が長く、たくさんある職業の中でも過酷なものというイメージがありました。実際インターンシップに参加した5日間はあるという間で、毎日が知らないことと驚きの連続で、とても刺激的で勉強になった5日間でした。放送局の仕事は、番組制作とそれを放送する仕事しか知らなかったのですが、その他にも営業、編成や美術などの様々な仕事が存在していました。私たちが普段目に見えている仕事だけでなく、その他に多くの仕事があり、それらがあって初めて番組が成り立っており、自分が見ていたのは、テレビの一面にしか過ぎないのだと気付きました。1日目に、ドキュメンタリー番組を視聴し、その番組を実際に作った人と直接会って対話をしました。この体験では、その番組を作った制作の意図や、どのようにしてこの番組が作られていたのかを教えてくださいました。ドキュメンタリー番組を制作するにあたっては、様々な人に話を聞いて、インタビューを行います。人に話を聞くというのは自分の想像よりも遥かに大変で、難しいことであるのだと思いました。「そのことを本当に聞きたいんだ。」「テレビでこのことをきちんと伝えていきたいんだ。」というディレクターの姿勢があつてこそ、人は口を開いて話をしてくれる気になるのだということを知りました。テレビを作っていく上で人との関わりは欠かせないものであり、話を聞く態度や、人との関わり方などの、人間力を問われる仕事であるのだと感じました。特に放送局というのは様々な場所で、様々な人と関われる仕事であるので、多くの人の考え方や生活に触れることができます。なので、人との出会い、一期一会を大切にしていかなければならない職業であるのだと感じました。

放送局で働く人々は、番組やラジオの放送をするという免許を、国からもらってやらせてもらっているという姿勢で取り組んでおり、その姿勢がとても大切なのだと思いました。私はテレビが大好きなので自分の好きなものを仕事にするということに対する不安がありましたが、自分の好きなことや憧れを仕事にすることは、苦しいことでもありますが、それでもやはり、テレビが好きじゃないとできない仕事であり、みんな好きだからこそ、誇りを持って頑張ることができているのだと感じました。

今回のインターンシップで、放送局だけにかかわらず、働くというのは自分が思っているほど甘いものではなく、自分のやる仕事には常に責任が伴い、自己利益だけを追求しているのでは成り立たないものなのだと痛感させられました。

話す力・聞く力・伝える力の重要性

NK大学：経済学部・流通・経営学科・3年

期間：平成27年8月17日～21日（5日間）

私はインターンシップを通して、新聞社の業務を知るとともに、改めてコミュニケーション能力の重要性を感じました。インターンシップ実習では、普段は見ることの出来ない現場を体験することができ、とても貴重な経験をさせていただくことができました。

5日間の実習では、新聞制作における流れを見学し、校閲を体験したり、取材に同行させていただき、実際に記事を書く体験もさせていただきました。また、新聞の印刷工場に見学に行き、新聞が読者の手元に届くまでにどのような過程を踏んでいるのかということを知ることが出来ました。

実習前は、新聞記者は取材をして記事を書く仕事であるというイメージを持っていましたが、実際にはそれだけではなく、取材時には自分で写真も撮るなど、多忙な仕事であるということがわかりました。また、一つの記事が完成するまでに何度も見直しがされたり、新しい情報が入ってくるたびに紙面の構成が変更されたりなど、多くの人の協力があって新聞という商品の形になっているということがわかりました。実習に行く前は、これほど多くの人が関わり、時間をかけて新聞が作られているとは思っていませんでした。また、Y新聞は地方紙ということで、地元住民の生活に密着したニュースをたいへん多く取り上げており、新聞の購読数が減っていくなかで、地方紙はこれからも地域で重要な役割を担っていくと思いました。

実習中に記者にとって必要なことの一つは我を抑え、聞き役に徹することだと聞きましたが、実際に記者の方は聞き役になり、取材相手から話を引き出すのが上手だと感じました。相手に気持ちよく話してもらうということは、良い人間関係を築いていくためにも求められることであるため、意識していこうと思います。また、どのようなことに対しても常に疑問を持つことが大切だと聞きましたが、それはコミュニケーション能力の向上にもつながると感じました。

記事を書いていくなかで、事実を正確にわかりやすく伝えることの難しさを実感しました。新聞記事にとって文学のような表現力や想像力は重要ではなく、誰にでもわかりやすく書くことが重要であるとわかりました。新聞は、小学生から高齢者まで幅広い世代が読むということを考えておく必要があります。そのため、中学生にとってわかりやすいように作られており、使われる漢字なども中学生を基準にされていました。また、新聞が作られる過程を知ったことで記事のしくみもわかり、新聞の読み方も変えていこうと思いました。

5日間の実習を通して、新聞は多くの人の苦労が積み重なって作られているということを知ることが出来ました。そして、どの業界・業種でも、どのような職種であっても、コミュニケーション能力は必要であると改めて感じました。社会人として必要なコミュニケーション能力を身に着けるためには、様々な世代の人と会話をしていくことが必要だと思いました。また、質問に対して的確な返答をするというのも就職活動において必要であると思いました。残りの学生生活において、学生生活を充実させ、企業研究なども進めていくとともに、常に疑問を発する姿勢を持ち、コミュニケーション能力を高めるために普段の会話から意識していこうと思います。

～テレビ局でのインターンシップ～

おもしろく、人を惹きつける私でありたい

TJ大学：現代教養学部・人間科学科・3年

期間：平成26年8月26日～30日（5日間）

テレビ業界を志望していたものの、はっきりとどのような場であるのかを把握できていなかった私にとって今回の研修は非常に身になるものでした。特にほぼ毎日、実際の取材現場へ同行しニュースとなるまでの過程を間近で見て体験できたことが印象的です。現場で臨機応変に質問を投げかけ情報を収集し、帰社後、原稿作成や映像編集を限られた時間で仕上げていく過程を目の当たりにしたとき、自分が今までにイメージしていたものが覆されました。それと同時にその仕事現場に強い憧れを抱きました。私が夢見ていた場所は、私が思っていたよりも達成感を感じられる場所だと思いました。企業の方々が優しく指導してくださり、また私が投げかける質問にも倍の答えで返してくださりと、貴重な時間を過ごしこれからのやる気にもつながっています。5日間の研修は「自己」というものを考えさせられました。初めての環境に入り、普段の学生生活をしている自分とは別の自分に気づきました。自分は人とコミュニケーションをとることが好きであることに気づけた反面、まだまだ会話の引き出しが足りていないということにも気づき、それをどう補っていくのかというアドバイスをいただいたことで、これから就職活動で何を意識していけばよいのかを知ることができました。努力を惜しまずコツコツ積み重ねた結果が就職活動で実を結ぶと感じました。コミュニケーションをとることが好きであることに気づけたのは、企業の方々をはじめ、取材で出会った方々のおかげであると感じています。4日間の取材同行を通して、普段の学生生活を送る範囲では出会うことのできないたくさんの人と出会い、人の温かさを感じ、また人のおもしろさにも気づけた貴重な時だったと思います。

取材同行のほかに毎日夕方に放送されているニュース番組の現場を見学させてもらいました。生放送の30分前にクロスプラグが行われ、その日に報道される内容を大まかにリハーサルして流れを確認して本番が始まるという流れでした。現場はとても緊張感があり、取材のときはまた違う雰囲気を感じました。VTRはどう流れるのか、スーパーをどのタイミングで誰が出すのか、アナウンサーはどのようにして原稿を読んでいるのかなど疑問に思っていたことがすべて解消されました。約45分間、団結して集中し続ける姿はとてもやりがいのあることだと思いました。常日頃見ているニュース番組の現場がどのような仕組みになっているのか、どのように作られているのかを学ぶことができ、研修後のニュース番組に対する姿勢が変わりました。

私自身、これまでの学生生活で職場体験を経験したことがなく、今回のインターンシップ研修は社会への第一歩だと感じています。5日間という短い期間ではありましたが、非常に濃い時間を過ごすことができました。憧れていた現場で働く人の生の声を聞け、さらに就職活動に向けてのアドバイスもいただき本当に貴重な経験でした。おもしろく、人を惹きつけるような人であらうと思いました。今でも濃く印象に残っているこの5日間を必ず今後の身になる経験としてつなげます。

最後になりますが、研修に参加するにあたって多くの方々に出会えたこと、また指導していただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。